



Data

監督・脚本: ジャン・ベッケル
 原作: ジャン＝クリストフ・リュファン 『Le Collier Rouge』
 出演: フランソワ・クリュゼ/ニコラ・デュヴォシェル/ソフィー・ヴェルベーク/ジャン＝カンタン・シャトラン/パトリック・デカン/トビアス・ニュイッテン/イェーガー&カルマ

👁️👁️ みどころ

総力戦になった第1次世界大戦の塹壕戦の悲惨さは、『西部戦線異状なし』や『チボ一家の人々』等の小説、そして『ロング・エンゲージメント』(04年)や『戦場のアリア』(05年)等の映画で描かれている。また、『戦火の馬』(11年)は軍馬を主人公として登場させたが、本作では犬が！

「軍判事」なる職業は、弁護士の私ですらよくわからないが、本作では戦争の悲惨さを体験した2人の男が、尋問を巡って対峙するストーリーの中から見えてくる真実をしっかりと確認したい。

83分の長さでこれだけエッセンスを盛り込むフランス映画はすごい。やたら説明調が目につく昨今の邦画はこんな手法を学ばなくちゃ！余韻いっぱいラストを、しっかりと味わいたい。



■□■第一次世界大戦の戦場には馬も犬も！この犬はなぜ？■□■

2003年3月20日に始まったイラク戦争は、イラクのフセイン大統領が大量破壊兵器を保持しているか否かが唯一最大の争点だった。この大量破壊兵器とは、①放射能兵器②化学兵器③生物兵器④核兵器等で、第二次世界大戦当時の戦艦、空母、戦闘機、戦車等の大量破壊兵器とは全然レベルが違うもの。そうすると、第一次世界大戦当時の、とりわけヨーロッパ西部戦線における大量破壊兵器とは？

それは戦闘機、潜水艦、戦車、火焰放射器、そして毒ガス等で、とりわけ西部戦線における塹壕戦の悲惨さは、『西部戦線異状なし』や『チボ一家の人々』等の小説で詳しく描かれている。第一次世界大戦の塹壕戦を描いた映画の名作は、『ロング・エンゲージメント』

(04年)『シネマ7』280頁)や『戦場のアリア』(05年)『シネマ33』214頁)等がある。そして、『戦火の馬』(11年)はその第一次世界大戦の塹壕戦の中に投入された軍馬を主人公にした興味深い映画だった(『シネマ28』98頁)。しかし、あの塹壕戦に軍馬が必要だったとすれば、より身近な戦力として犬も必要だったのでは？

本作の原作者であるジャン＝クリストフ・リュファンは、本作のパンフレットにあるインタビューの中で、「実際にあった出来事を基にしているのでしょうか？」という質問に対して「二つの出来事を基にしています。まず一つ目は、ほとんど知られていないことです。第一次世界大戦で多くの動物、とくに犬が巻き込まれていたという事実です。塹壕には何十万頭もの犬がいましたが、多くは飼い主が動員された際についてきた犬で、共に前線にいたのです。犬は役に立ったので、その存在が黙認されていました。ネズミを殺したり、敵を威嚇したり、兵士に同行していたのです。」と答えている。

しかして、本作冒頭には一匹の黒い犬が留置所の前で吠え続けている風景が登場するが、この犬はなぜ吠え続けているの？

■□■レジオンドヌール勲章受勲の英雄がなぜ留置所に？■□■

去る12月19日に観た『母との約束、250通の手紙』(17年)は、“フランスの三島由紀夫”とも称され、ゴンクール賞を2度も受賞した天才作家ロマン・ガリが、『孟母三遷』で有名な孟子の母親を遙かにしのぐ、超スパルタママの下で成長していくサマを描いた興味深い映画だった。彼は子供の頃から、「お前は将来、自動車を手に入れる。フランスの大使になる」「お前はトルストイになる。ヴィクトル・ユゴーになる」と念仏のように唱えられながら成長していったから、そのプレッシャーたるや如何ばかり・・・？ところが彼は、12月21日に観たケン・ローチ監督の問題提起作『家族を想うとき』(19年)に登場する、出来の悪い長男のような愚行、非行に走ることなく、母親と離れ離れになりながらも順調に作家と軍人への道を進んでいったから、立派なもの。そして、度重なる戦場での奮闘と功績によって、フランス解放十字勲章を受勲したからすごい。

ところが、今、留置所に収監されている男ジャック・モルラック(ニコラ・デュヴォシエル)も、実は西部戦線でのソムムの戦いやテッサロニキの戦いにおける奮闘と武功によって、荣誉あるレジオンドヌール勲章を受勲していたらしい。

かの大戦において、日本の男たちは「赤紙」と呼ばれた召集令状によって次々と戦地に送り出されたが、第1次世界大戦中のフランスでも、「総動員令」の発令によって壮年の男子は全員戦場に向かったから、当然ジャックもその一員に。しかし、1915年に召集された時、この男はどこでどんな生活をしていたの？そして、なぜレジオンドヌール勲章を受けるほどの兵士に成長したの？本作導入部を見ていると、当然そんな疑問が湧いてくる。さらに、それに続く疑問は、そんな英雄がなぜ今留置所に収監され、軍判事ランティエ(フランソワ・クリュゼ)の尋問を受けているの？ということだが・・・。

■□■軍判事ってナニ？そのシステムは？それはさておき■□■

2019年3月に念願の『“法廷モノ” 名作映画から学ぶ生きた法律と裁判』を出版した私は、その第2節「軍事法廷では？」で、『明日への遺言』(08年)(275頁)、『私は貝になりたい』(08年)(281頁)、『ヒマラヤ杉に降る雪』(99年)(287頁)を紹介した。本作の一方の主人公であるランティエの肩書は軍判事だが、それって一体ナニ？それは、そんな本を出版した弁護士の私にとってもはじめて聞く言葉だ。私はそれを一種の軍法会議の判事のようなものと思ったが、どうも違うらしい。しかも、ランティエの軍判事としての仕事ぶりを見ていると、検事も弁護士もいない中、軍判事の彼が1人で被疑者からの事情聴取や補充捜査(?)を行い、1人で判断を下すシステムらしいから、アレレ……。これって一体ナニ？本作のメインテーマを理解する上では、そんな疑問は枝葉末節の問題だが、その点をもう少し解説して欲しかったと思うのは私だけ……？

それはさておき、1919年の夏、部下のポール(トビアス・ニュイッテン)と共にフランスの田舎町を訪れ、人気のない留置所の中に入ろうとしたランティエの目に入ったのは、吠え続ける黒い犬の姿。看守に聞いてみると、これは戦時中ずっとジャックに付き添っていた犬で、収監されたご主人様を想ってずっと吠え続けている、とのこと。この仕事で軍判事としての最後になるランティエは、最後の仕事はできるだけ穏便に済ませたいと願い、ジャックはどんな罪を犯したか、それはなぜなのか、を順序良く聞こうとしたが、そんな期待に反して、ジャックの態度は自暴自棄気味でよろしくない。尋問するランティエに対して、ジャックは当初ベッドに寝転んだままで対応していたほどだ。犯罪事実を明確に語らないまま有罪を認めてしまえば、軍判事はある意味で楽だが、最後の仕事は丁寧に！そんな気持ちのランティエは時間をかけ、少しずつジャックの気持をほぐしながら事情を聞きただし、整理していくことに……。

■□■田舎村にこんな知的な美女が！なれそめは？別れは？■□■

本作は本来のフランス映画らしく(?)、83分とコンパクトに収めている。そして、軍判事のランティエが被疑者のジャックを取り調べていくストーリー展開の中に、「愛犬」だけが真実を叫び続けた」というテーマを浮かび上がらせていく。そして、本作は「一匹の犬と勲章にまつわる秘話」だから、本作では2人の名優の他、2016年フランスで「一番美しいボースロン」に選ばれた名犬の演技も、大きなポイントになる。

そんな黒い犬が暮らしていたのは、郊外で農作業に勤しみながら小さな息子と2人暮らしをしている女性ヴァランティヌ(ソフィー・ヴェルベーク)の家。そんなヴァランティヌとジャックが瞬間に恋に落ち、結婚し、愛のある生活を送る風景を、本作は手際よく追っていくが、そこでは『三銃士』『若きウェルテルの悩み』等の本を自ら読み、子供にも読み聞かせているヴァランティヌの知性が際立っている。それに比べれば、ジャック

クの知的レベルはかなり低いから、ある意味では、この2人がなぜ恋に落ちたのかはよくわからない。しかし、2人が愛を育む展開は、誰よりもあの黒い犬がしっかり見ていたらしい。また、総動員令の発令によってジャックが戦場に向かわざるをえなくなった時、この犬も一緒に列車に飛び乗ったから、戦場におけるジャックの一挙手一投足も、この犬はすべて目撃していたことになる。ランティエがこのようなジャックとヴァランティエヌとの出会いと別れを知ったのは、彼自身がヴァランティエヌの村を訪れて事情聴取したためだが、なぜジャックが逮捕されたのかという肝心のことについて、彼女は何も知らないらしい。それはなぜなら、やっと戦争が終わったのに、ジャックはヴァランティエヌの元に帰ってこないからだ。

フランスの女流作家マルグリッド・デュラスの自叙伝的小説『苦悩』を映画化した『あなたはまだ帰ってこない』(17年)では、ナチスドイツが敗北し、パリが解放されたにもかかわらず、フランスに戻ってこない夫を待ち続ける妻の気持が、『あなたはまだ帰ってこない』というタイトルどおりの緊張感の中で描かれていた(『シネマ 43』220頁)が、それは本作のヴァランティエヌも同じ。本作では、いかにも素朴で一徹な男ジャックと、農婦ながらもなぜか知的で美しいヴァランティエヌの対比の妙も1つの見どころだから、そんな2人の束の間の愛の姿もしっかり観察したい。

■□■この武勲は誰のもの？塹壕戦での軌跡は？■□■

2019年のクリスマス・イブは、ひょっとして北朝鮮からアメリカに向けて、ICBM(大陸間弾道ミサイル)が発射されるかも？そんな予想が杞憂に終わったのは幸いだ。他方、今から約100年前の1914年に始まった第1次世界大戦は、当初はドイツが優勢だったから、ドイツ軍の最前線の塹壕には1914年12月24日のクリスマス・イブを祝うべく、クリスマスツリーが届けられた。しかも、それは5mおきに設置されたというから、すごい本数。さらに、そこにはダイアン・クルーガー扮する世界的なソプラノ歌手アナ・ソレンセンが登場し、アリアを歌ったからすごい。それを機に、その日に両軍の塹壕の中で起きた奇跡は、『戦場のアリア』(05年)を見ればよくわかる(『シネマ 33』214頁)。

それに対して、本作でジャックを含むフランス軍が対峙していたのは、ロシア軍とブルガリア軍。しかし、長い間の塹壕戦が両軍兵士に厭戦気分を生んでいたのは当然。そんな中、本作では、両軍が『インターナショナル』を歌いながら歩み寄るシークエンスが登場するのでビックリ。そこで、フランス軍が『ラ・マルセイエーズ』を歌い返せばヤバかったが、フランス兵も同じように『インターナショナル』を歌いながら歩み寄ったから、これならオペラ歌手がいなくても奇跡の和解が・・・？両軍の兵士はそう思ったはずだ。

ところが、そこに突如塹壕から飛び出し、ロシア軍、ブルガリア軍の兵士を襲ったのがジャックの愛犬。そのため、それまでの和平の雰囲気はたちまち崩れ去り、両軍は乱戦状

態に。『戦火の馬』(11年)でも、戦火の馬が塹壕の中を駆け抜けるシークエンスが登場した(『シネマ28』98頁)が、なるほど、ジャックとその愛犬にはそんな体験(エピソード)が・・・。

■戦争の悲惨さは人間性を一変！その拳句に主人公は？■

戦争は残酷で悲惨なもの。それは本や言葉の上ではわかっているが、実際に体験すると人間性を一変させてしまうものらしい。そして、本作に登場する2人の主人公は、2人ともそうらしい。もっとも、ランティエの人間性が一変したことについては詳しく描かれず、本人の説明だけだが、ジャックへの尋問が軍判事として最後の仕事になったランティエが、戦争の悲惨さを深く認識したことによって被疑者の心の闇に優しく迫っていこうという姿勢を打ち出したのは、ジャックにとって超ラッキーだった。

このように、かつての軍国主義者、愛国主義者(?)から、人間主義者(?)に性格を一変させたランティエに対して、ジャックの方は、かつての素朴で一徹な普通の男から、戦争を憎む男に一変したらしい。したがって、あの時の武勲によって自分が国家から受けた栄えあるレジオンドヌール勲章なんてクソ食らえ。そう考えていた上、そんな勲章にふさわしいのは俺ではなく、ずっと俺に付き添い、あの時ロシア兵、ブルガリア兵に向かつて行った愛犬だ。そう確信していたことは間違いない。

しかして、レジオンドヌール勲章の受勲式の日、彼はそんな確信の下に、レジオンドヌール勲章を愛犬の首にかけてやったから、さあ大変だ。なるほど、彼が今留置所に収監されているのは、そんな風にレジオンドヌール勲章をバカにし、国家を侮辱した容疑のためだったのか！自らの補充捜査(?)でそれをしっかり理解したランティエのその後の尋問は？そして、それを前提に彼が下した判決は？

2019(令和元)年12月26日記